

よみがえ

蘇る古代都市 ポンペイ

加藤 良一
令和4年(2022) 3月1日



現在、東京国立博物館で特別展「ポンペイ」(1月14日～4月3日)が開かれている。観に行きたい思いはあるが、コロナのまん延防止措置の再延期が取りざたされているし、以前ポンペイの遺跡を見学したこともあるので、無理に出かけることもあるまいと様子見の状態である。

西暦79年8月24日、ナポリの西に位置するヴェスヴィオ山が大噴火を起こした。その噴煙や火山灰、さらに火砕流はヴェスヴィオ山から南東に向かって流れ、ポンペイの街を埋め尽くした。(上図の黒い部分)



ポンペイは商業が盛んな都市で、大きな港を抱える海洋都市であった。主な産業はワインの醸造だったという。

道路は碁盤の目状に整備され、主要な通りは石で舗装されていた。中心には広場もあり、計画的に都市設計がなされていた。

街の守護神は、美と恋愛の女神ウェヌス。娼婦の館も発掘され男女の交わりを描いた壁画が多く出土している。そのようなことからポンペイは今では「快樂の都市」とも呼ばれている。古代ローマ時代は、性的におおらかな時代で、ポンペイに限らず各地の商業都市には商人向けの娼婦の館が多数あったという。

大噴火の予兆はあった！

ヴェスヴィオ山の大噴火が起きる17年ほど前の西暦62年2月ポンペイでは大きな地震があり、周辺のカンパニア諸都市[※]が大きな被害を受けた。地震の復興作業も十分進まないうちに、続いてヴェスヴィオ火山の大噴火が

襲った。火山灰が激しく降り続き、噴火から半日後には火砕流も発生し、ポンペイは瞬間に完全に地中に埋まってしまった。海岸では水がみるみる引いていった後に「津波」が押し寄せてきた。多くの市民が火砕流発生前にローマなどに逃げ出していたが、2万人程いたポンペイ市民のうち、逃げ遅れた2千人が犠牲になった。

※カンパニア州はカゼルタ、ベネヴェント、ナポリ、アヴェッリーノ、サレルノの5県からなる。

こうしてひとつの町が、完全に火山灰の下に埋没してしまった。いまから二千年前の、まさにその時の市民の生活が、そのまま一瞬にして、タイムカプセルに入れられてしまったように地下に眠ってしまった。その後、時間が経つにつれポンペイの存在は徐々に忘れられ、いつしか人々の記憶から消えてしまった。かつて賑わったポンペイの町は、単なる草に覆われた丘陵地帯となっていった。

ところが、1709年のこと、井戸を掘っていた農民が、美しい大理石の柱を掘り出したことがきっかけになって、大々的に発掘調査が行われ始めた。その後、新たな遺跡が次々と発見され、世界の人々を驚かせた。現在も発掘と遺跡の修復が続けられている。しかし、出てきた遺跡の保存がまた大きな悩みの種だという。風雨による浸食も去ることながら、一番の問題は心ない観光客によるいたずらだというから寂しい。

ポンペイと周辺の別荘からは多数の壁画が発掘され、古代ローマの絵画を知る上で重要な作品群となっている。現在、遺跡は世界遺産に登録されている。おそらく火山の大噴火で埋没しなければ、さほど特別な町でもなかったことだろう。

ロベール・エティエンヌの『ポンペイ・奇跡の町』に噴火の様子が克明に描かれている。

西暦79年8月24日。夏の日の夜明けにしては暑い。暑すぎるくらいの日だった。突然、大地を揺るがすような爆発音と共に、熱風が押し寄せた。驚いたポンペイの人々の目に映ったのは、山頂に巨大な火柱を噴き上げるヴェスヴィオ山の姿だった。続いて真っ赤に焼けた石が雨あられのごとく町に降り注ぎ、灰が人々の目や口や肺をふさいだ。(中略)窓をふさぎ、灰はやがて屋根の高さにまで達した。



炭化したパン



カメオガラスでできた青の壺

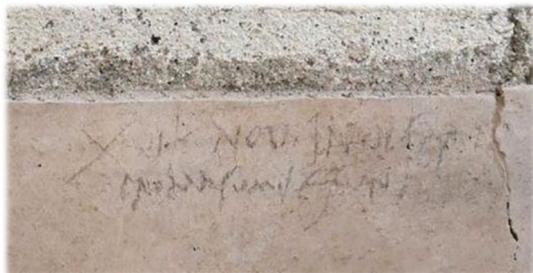


踊る牧神ファウヌスのブロンズ像

ポンペイには、フォルムと呼ぶ中央広場、劇場、円形闘技場、浴場、運動場といった公共の施設が多数あった。富裕な市民たちの暮らしぶり、宴席を飾る贅沢な調度品などが、火山灰によって外界から遮断されたことで、原型が保存されていた。ポンペイには30軒ほどもパン屋があったらしく、その店構えも石造りだからこそ、今日まで遺されている。

ポンペイが消えたのは8月ではなく10月だったのか？

冒頭にしたようにヴェスヴィオ山の噴火は、西暦79年8月24日というのがこれまでの定説となっているが、それに対して、じつは同じ年の10月17日以降だったのではないかと考古学者は提唱しているという。



その根拠は、ある家屋跡の壁に木炭で、『XVI K NOV』という落書きのような文字が書かれていたことにある。これは「11月の最初の日からさかのぼって16番目の日」という意味で、10月17日を意味している。さらに、灰に埋もれた遺跡からは、秋に実るはずの果物が枝についたままの状態で見えたり、焼け死んだ人が身に着けていた衣服や遺された食べ物などから総合的に判断すると、季節は夏ではなく秋ではないかとの結論に至ったという。

考古学チームは、「落書きは西暦79年年10月のものである公算が極めて大きい。より正確には、10月24日とされる火山噴火の1週間前の日付になる」との声明を出している。噴火の日付が2か月繰り下がり、歴史を大きく変えなければならない可能性が出てきた。

日本では、ポンペイのことは子どものころから誰もが知っているはなしだ。しかし、実感を伴わない歴史上のこととしか受け止められなかったが、実際にポンペイを訪れ、大通りから路地裏へとくまなく歩き回り、遺跡に囲まれながら古代へと思いを巡らすことができた。

遺跡見学のあと、パスタ中心のランチをとった。その店では初老の流しのテナー歌手がテーブルを回りながらナポリ民謡を聞かせていた。小遣い稼ぎか本業かは知らないが、無理のないきれいな声を聴かせてくれた。「正調」のナポリ民謡は、ふつうやや^{かす}掠れ声を特徴としているというが、そのテナーは必ずしもそうではなかった。いくらチップを弾んだか忘れたが、「サンタ・ルチア」をリクエストし、ひと時のランチを楽しんだ。



[「洗濯船」TOPへ](#)



[Home Pageへ](#)